

翻訳を通して文化が規定するアブノーマルの概念を考える

その他のタイトル	Examining How Culture Shapes the Concept of Abnormal -through Translating the Works of Ruth Benedict
著者	菊地 敦子, 福井 七子
雑誌名	関西大学外国語学部紀要 = Journal of foreign language studies
巻	12
ページ	45-68
発行年	2015-03
URL	http://hdl.handle.net/10112/9652

翻訳を通して文化が規定する アブノーマルの概念を考える

*Examining How Culture Shapes the Concept of Abnormal
— through Translating the Works of Ruth Benedict*

菊地 敦子 福井 七子
Atsuko Kikuchi Nanako Fukui

Benedict's paper "Anthropology and the Abnormal" challenged traditional psychology by claiming that what is normal and what is abnormal is shaped by culture. In doing so, Benedict risked exposing her own lesbian sexuality which was considered 'abnormal' at the time. Translating this paper into Japanese provides important information for Japanese scholars in that the paper reveals the close connection between Benedict's research and her personal life and convictions.

キーワード

ベネディクト、ミード、アブノーマル、社会的規範

はじめに

本論はルース・ベネディクトが1934年『一般心理学ジャーナル』に寄稿した論文を翻訳し、解説を加えたものである。文化人類学者ベネディクトが「アブノーマル」をテーマに論文を書いたことは、彼女が文化人類学という学問に出会い、救われたように感じたその原点に結びつくもので、また生涯にわたって挑みつづけた重要な学問形成のひとつとなったものである。「アブノーマルなもの」と文化人類学」は重要な論文であるにもかかわらず、まだ邦訳されていない。この論文は、ある意味でベネディクトが学者としての生命を賭して書いたものと言えよう。それまでのアブノーマルとノーマルの定義を科学的に打ち壊すことを目的として書いたものであり、心理学的に定義されていたアブノーマルとノーマルを再定義するという試みは、ベネディクトの社会的立場も脅かしかねないリスクを伴うものであった。しかし、彼女はあえてそのリスクをとったのである。心理学的に「アブノーマル」と規定されたさまざまな現象をとらえ、そうした異常に対する定義を変えるべく、心理学者を駆り立てるために書いた論文であった。

それがために、ベネディクトは一般心理学のジャーナルに投稿したと思われる。

私たちは、ベネディクトの論文を翻訳するとともに、ベネディクトがこの論文を書いた背景に焦点を当て、その意義と目的を探りたいと考えている。

先日ある会合で、国際日本文化研究センターの所長であった宗教学者の山折哲夫先生にお会いした。その時、少し話しがベネディクトに及んだ時、山折先生はベネディクトの写真を見ながら、「この目がね」と一言おっしゃった。山折先生がどのような意味でそのようなことをおっしゃったのか、その含意についてあえて聞くことはしなかった。しかし、何となく理解できる気がした。相手の心を射抜くような強さと、ある意味底知れぬ頑固さと繊細さを帯びた視線だと理解した。それを裏付けるような記述を、マーガレット・ミードの一人娘であるキャサリン・バイトソンの『娘の眼から』にみることができる。「ルースというひとは、頻繁に憂鬱と困惑に打ちひしがれながらも、社会が女性に期待する伝統的な価値規範から、独自の自己実現と創造に向かってつらく長い道りを歩んでいった女性である。……かすかな記憶のなかから立ち上がってくるのは、ルースお婆さんのいつくしみに溢れた気くばりだった。」(バイトソン：1993：212)

ベネディクトが文化人類学を通して訴えようとした当時の伝統的な絶対的な価値規範に挑んだ人生は、孤独なものだったことは想像に難くない。

本論は、ベネディクトが書いた英語のニュアンスを大切に、彼女の意図を探りつつ邦訳した。

I

ルース・ベネディクトは1931年の夏、コロンビア大学助教授として仕事をし、もはや彼女が口癖のように言っていた“unemployed wife”ではなく、経済的にも社会的にも安定した生活を得ていた。1930年代はアメリカにとって重要な時期で、それは第二期モダニズムとも呼ばれる時代であった。ダーウィン主義の進化論の影響から、またその矛盾から新しい統合を模索するという時代であった。ベネディクトはそうした時代に社会的立場を得た文化人類学者であった。現代的なものの見方は様々な方面に影響をおよぼし、社会と世界に対して新しい視点で物事を捉えていく基礎が築かれていくことになった。

ベネディクトは家庭と社会における相反する女性の役割を解決するための枠組みを提供したと考え、それが課題の一つとなっていた。また、この30年代は彼女個人にとっても大きな変革が訪れた時期であった。マーガレット・ミードとの「親密な関係」は一応の終わりを迎えたのである。

マーガレット・ミードは1925年8月末、南太平洋の14の島々からなるサモアでフィールドワークを開始した。サモアの色々な場所を移動しながら適当な場所を探していた。出発前にボ

アズやベネディクトから言われていたように、そして自分自身も心に期していたことは、「文化全般を研究しようとせず、自分が調査したい分野にしぼる」というものだった。（マーク：2009：28）サモアで9ヶ月間過ごすのが、ミードは「ひとりぼっちで寂しかった」。そして次のフィールド・ワークには「ぜったいにパートナーをみつけよう。もう二度と、ひとりで遠くへは行きたくない、心から思った」のであった。（マーク：2009：45）彼女はサモアから帰途につき途中、オーストラリアに立ち寄り、オーストラリアから乗船した「顔立ちの整った長身の心理学者、レオ・フォーチュンにであった」。（マーク：2009：46）ニュージーランド人であったフォーチュンはイギリスに留学しようと考えていた。人類学と心理学に造詣が深かったフォーチュンとの会話にミードは惹かれていき、また感銘を受けた。彼らは船がフランスのマルセイユに入港するまで、またその後も話し込んだほどであった。マルセイユでは、その頃ミードの夫であったルーサー・クレスマンが彼女の帰りを待っていた。しかし、ニューヨークに戻って6ヶ月後、彼らは離婚した。ミードがフォーチュンとの結婚を望んだためであった。その後、ミードはサモアでの調査をもとに本を書き終えた。それが *Coming of Age in Samoa*（Mead: 1928）『サモアの思春期』（ミード：1976）で、1928年にウィリアムモロー社から出版された。（マーク：2009：48）

ミードは『サモアの思春期』を書き終えると、次に計画したフィールド・ワークの地としてニューギニアを選んだ。なぜならレオ・フォーチュンがそこで研究をしていたからである。マヌスにおける信仰について研究することを予定していたレオ・フォーチュンに対して、ミードは子どもの心を探ろうとした。（マーク：2009：53）ミードがマヌスに滞在している間に、アメリカでは『サモアの思春期』がベストセラーになっていることを聞いた。彼女はまだ30歳にもなっていなかった。

1929年秋、ミードはニューヨークに帰り、アメリカ自然史博物館の仕事に復帰したが、もはや以前のミードではなく、生活は一変し、著名な学者となったのである。彼女の生き方自体が新しい女性の生き方のひとつのモデルとして注目を集めることとなっていった。ミードのこうしたイメージは彼女が癌によって死亡する1978まで続くことになる。そのイメージの強烈さは、ミードの実像以上に大きなものだったのではないだろうか。

南太平洋への二度にわたるフィールド・ワークの後、ミードとフォーチュンはニューギニアに出かけた。皮肉なことにこのニューギニアの過酷極まりない自然環境における旅行がフォーチュンとミードを別離へと導くこととなったのである。一年にも及ぶフィールド・ワークの後、二人はその地を後にし、セビック川から上流にあるアンブンティヘ行った。しかし、このフィールド・ワークはミードにとって精神的にも肉体的にも疲労困憊させるものとなった。フォーチュンというが故に、孤独感は倍化した。途中の村で、彼らはフィールド・ワークをしていたイギリス人の文化人類学者グレゴリー・ベイトソンに会った。ミードは久しぶりのやさしさに触れ、堰を切ったようにベイトソンと話し込んだ。ベイトソンの父は著名な生物学者で、彼自

身も生物学の教育を受けていた。(マーク：2009：71-73) それがミードとベイトソンを結びつけるきっかけとなった。

II

ベネディクトとミードの親密な関係は終わりを迎えた。それは、ミードがベイトソンと結婚したがために終わったのではない。ベイトソンと結婚してもミードはベネディクトとの親密な関係を続けた。(ベイトソン：1993：211) ミードは女性、男性に関係なく惹かれ、永続性は求めていなかった。しかし、ベネディクトはミードとは違っていた。ミードは同性愛者であることが社会的に知られて自分にとって不利に働くことを恐れ、それを徹底的に阻止した。その相手がたとえ自分の娘であったとしても。彼女の娘であるメアリー・キャサリン・ベイトソンが若い頃、同性愛に傾くようなことがあったとき、ミードは「おまえのスキャンダルが暴露されたら私のプロフェッショナルな生活はどうなるの」と言い、決して娘の行動を許さなかった。(ベイトソン：1993：223)

若くして著名な学者として注目されたミードの生き方は、社会的にも「新しい女性像」としてのイメージを保ち続けることが求められることとなったためだろう。しかし、ベネディクトは違っていた。ミードとの関係の後、彼女は二度とヘテロセクシュアルに戻ることはなかった。

ミードとの「親密な関係」後、ベネディクトは一人の女性にめぐり合った。彼女とならば、「人生を共にするという危険を、喜んで冒してもいいと思う」女性であった。彼女の名はナタリー・レイモンド、カリフォルニア出身のコネル大学の医学生であった。(カフリー：1993：295) ベネディクトは1934年6月15日付の文書のなかで“loving Nat and taking such delight in her I have the happiest conditions for living that I've ever known” (Ruth Fulton Benedict Papers, 1) 「ナットを愛して、彼女の魅力に浸ることによって今までに経験したことがないほどの幸せをかみしめて生きている」と書いている。ベネディクトとナタリーは一時期、ニューヨークで生活をともにした。(カフリー：1993：295) ベネディクトにとって自らの置かれて立場が、当時のアメリカでは決して受け入れられないものであることを知るとともに、「同性愛者の社会的立場を変えること、あるいは社会における見捨てられた立場を科学的に訴えること」で、社会の見方を変えることが目的のひとつとなったことは間違いないだろう。

ベネディクトはノーマルとアブノーマルを定義した心理学者をターゲットとして論文を書くことにした。本論で取り上げたベネディクトの論文「アブノーマルなもの文化人類学」は1934年の *Journal of General Psychology* に掲載されたものであるが、この論文は1932年の時点ですでに完成されていたようである。(カフリー：1993：296)

ベネディクトがこの論文の結びに書いているなかに彼女のアブノーマルとノーマルに対する思いを見ることができる。「文化的要素を切り離して、アブノーマルな人間を絶対的な価値観で

理解するのはまだ遠い将来のことである。私たちの文明における神経症や精神病の研究に由来する境界性行動のカテゴリーは、その地における一般的な不安定な性格を表わすものである。そのカテゴリーの成員を見ると、西洋文明のストレスや緊張に関する情報は得られるが、必然的な人間行動の最終的な記述とはならない。……何が道徳的、非道徳的行動かという地域の慣習は、絶対的なものではないが、人類全体が共有するわずかな正邪の区別を導き出すことは可能である。精神学のデータが手に入るようになれば、アブノーマルな人間の傾向の最低限の定義は、おそらく文化的に規定され、分裂病や躁鬱病などのように複雑に定義された精神病とはかなり異なったものになるだろう。」つまり、「不安定な性格を持っている人物の特定の行動は、その人の持つアブノーマルな面を表わす唯一の、あるいは必然的な行動ではない。社会の他の人と同じように、彼は伝統的に規定された行動パターンをとっているのである。」そのため、「……どの社会においても流行からはずれた不安定な特徴がある。流行にあったものを感化されやすい人に与えれば、その人たちはそれをすぐに真似ることになる。彼らは社会の大多数を占めており、社会からはアブノーマルとみなされる。」こうしたことから明らかなことは、「ノーマルとかアブノーマルといったことではなく、あるグループの生物学的、遺伝的特徴でもなく、社会的パターンということである」。

ノーマルが意味することは、文化によって育てられた人間性の一部であり、アブノーマルが意味するのは、文化が扱わない潜在的行動の一部である。前者は「社会が認めたもの」であり、期待される範囲に自分の行動をあわせたものである。

アブノーマルの範疇にももちろん同性愛も含まれる。ベネディクトの論文を解釈すれば、同性愛を制度化する社会では、多くの人が同性愛者になるだろう。つまり、それが彼らの文化に適合するからである。しかし、こうしたことが許されず、認められていない社会では、彼らの人間的価値は無視され、アブノーマルというレッテルを押される。こうした社会で生きるためには、自分自身の全人格を曲げることによってのみ、その文化の一員として認められるのである。

ベネディクトはプラトンの言を引用し、古代ギリシャにおいて同性愛は、「いい生活への重要な手段と考えられていた」とし、「もし文化が彼らに対して普通になるように強制するとすれば、どんな人でも活力を失うであろう」と書いている。またベルターシュ（オトコオンナ）とフランス人が呼ぶ人たちの慣習を説明する。「ベルターシュたちは思春期、あるいはそれ以降に女性の服を着たり、女性の職業に就いたりする男である。時には別の男と結婚し、一緒にすんだ。……ベルターシュたちは……一流の超自然の能力をもった人とはみなされず、女性の職業のなかのリーダー、あるいは特定の病気を治す人たち、あるいは部族によっては社会的な事柄を扱う親切的な管理者として扱われた。いずれにしても、彼らには社会的な地位があった。正道からはずれた人たちが味わうような社会のパターンに参加することが許されないといった葛藤を彼らは味わうことがなかった。」

ベネディクトはさらに言を進める。「ノーマルという言葉は、どの文化においても社会的に練

り上げられた人間行動の部分で、アブノーマルというのは、その文化で使われない人間行動の部分の指している。物事をみる私たちの目そのものが、私たちの社会の長い伝統的な習慣によって調整されている。」「ノーマルの概念は確実によいものの一部として扱われる。それは社会が認めたものである。ノーマルな行動は、特定の社会で期待されている行動の範囲に収まるものである。様々な人たちの間に見られるノーマルの多様性は、その集団が行動のパターンのバリエーションとしているものである。そしてノーマルとは文化的に確立された行動から切り離すことはできない。」つまり、ベネディクトが述べているノーマルとは、文化によって育てられた人間性の一部ともいえるべきものであり、それに対してアブノーマルが意味するのは、文化が扱わない潜在的行動ともいえるべき一部なのである。それゆえ、多くの人々は期待される範囲に自分たちの行動を合わせているのであり、そうでない文化においては、つまり同性愛が制度のなかに組み込まれている社会では、同性愛者も決して異常な存在ではなく、逆に多くの人が同性愛になる可能性もある、ということを描いている。決して唾棄すべき存在などではないのだと訴える。つまり、この論文は彼女の人生を縦糸に、そして「アブノーマルと文化人類学」というテーマを横糸に織り上げた作品ともいえるべきものであろう。したがって、私たちは本論の結論をあえて書かないことにした。なぜなら、彼女が織り上げようとした作品は、これ以降も続く大きなテーマとなったのだから。

なお、翻訳文の中で現在差別的だと考えられている語がある。しかし本論では、本文の通り訳したことをお断りするものである。

References

- キャサリン・ベイトソン『娘の眼から マーガレット・ミードとグレゴリー・ベイトソンの私的メモワール』佐藤良明・保坂嘉恵美訳、国文社、1993年。
- Caffrey, Margaret M. 1989 *Ruth Benedict: Stranger in this land*. Austin: University of Texas Press.
- M・カフリー『さまよえる人 ルース・ベネディクト』福井七子訳、関西大学出版部、1993年。
- ジョン・マーク『マーガレット・ミード—はるかな異文化への航海 (オックスフォード科学の肖像) オウエン・ギンガリッチ編集、西田美緒子訳、大月書店、2009年。
- Mead, Margaret. *Anthropologist at Work, Writings of Ruth Benedict*, New York: Houghton Mifflins, 1965.
- Mead, Margaret. 1928. *Coming of Age in Samoa*. New York: Morrow.
- M・ミード『サモアの思春期』畑中幸子、山本真鳥訳、蒼樹書房、1976年。
- Ruth Fulton Benedict Papers: ヴァッサー大学のベネディクト・コレクションに保管されているベネディクト関連文書。



マーガレット・ミード



ルース・ベネディクト

アブノーマルなもの文化人類学*

現代社会人類学は、文化環境の多様性と共通点、そしてそれが人間の行動に与える影響の研究に変わりつつある。多様な社会秩序の研究にうってつけの実験材料を提供するのは、スタンダード化された世界の文明に影響されていない未開の人達である。ダイク族（Dyaks）、ホピ族（Hopis）、フィジー族（Fijians）そしてヤク族（Yakuts）は心理的社会的研究において重要である。なぜならこれらの素朴な人たちにおいてのみ、地元の社会形式が発達するために必要とされる他の部族との隔たりが十分確保されているからである。発達した文化では、習慣や信仰がいくつかの大陸でスタンダード化されているために、それが当たり前だという間違った感覚を与える。広範囲にわたって存在し、馴染みがあるこれらの習慣に基づいて、われわれの判断が正しいかどうかチェックするには、他の広い範囲の文化を見なければならぬ。未開の文化のほとんどは、私たちが経験を通して、自然な人間の形だと思っているものをもっていない。しかし、これは様々な歴史的な理由によるものであり、私たちの文化だけが社会的善意、または何が社会的にノーマルかを決められるわけではない。この点からみると、近代文明というのは、必然的な人間の業績の必然的な到達点ではなく、長きにわたってその時々に必要な調整を繰り返して得た一つの結果にすぎない。

どの社会においても人間の行動は社会に合わせて調整される。それは怒りを表わす方法、喜

* *Journal of General Psychology*, 10, No. 2 (1934年), 59-82 ページ

び、あるいは悲しみを表わす方法、性的欲求の表わし方の調整である。その調整の仕方は一つの文化を見ただけではわかり得ないほどバラエティーに富んでいる。特定の分野、たとえば宗教の分野、あるいはお見合いのような分野では、これらのバラエティーの多さはよく知られており、たやすく記述することができる。しかし、他の分野では一般化した説明は困難である。しかしだからといって、これまで行なわれてきた重要な研究、あるいは持ち上がった問題を無視するわけにはいかない。

これらの問題の一つは、近代において慣習的に分別される「ノーマル」と「アブノーマル」というカテゴリと、その分別法によって私たちが導く結論である。この分別法がどれだけ自分たちの文化に基づいて決められているのか、そしてそれが、絶対的であるとどこまで確信がもてるのか。社会的に機能できないと、異常だと言い切れるのか。そしてどこまでこれは文化によると考えるべきなのだろうか。

実際、様々な文化の研究で現われてくる最も印象的なことの一つは、我々の文化のなかでアブノーマルとされることが、他の文化ではいともたやすく受け入れられていることである。どのようなアブノーマルな現象をとっても、それは変わらない。たとえば、極端な精神的不安定、サディズム、朦朧、誇大妄想、脅迫観念に属するようなアブノーマルは、よく研究されている文化において容易に、そして尊厳をもって社会に受け入れられ、危険人物だとは考えられない。

アブノーマルのなかで、最もタチが悪いのは、トランスと強硬症である。少しでもその傾向があると、我々の文化では異常と見なされる。しかし、多くの文化で極端な心理状態はノーマルで望ましいものだと見なされるだけでなく、非常に価値があり、特別な才能を持っている人の特徴だと思われる。これは、私たちの文化においても実は同じで、忘我的体験を成人の表われとみなした時期がカトリック教徒にあった。このような体験を尊び、この体験をした人が社会で重要な役割を果たすとしたら、何人の人がこのような体験をするのかを図り知るの、このような体験を全く利用しない文化で生まれ育った我々にとっては困難なことである。

カリフォルニアのインディアンの部族のいくつかは、ある種のトランス経験を経た人たちに名誉を与えた。シャスタ族¹⁾の間では、このような体験に恵まれるのは女性だけだと一般的に考えられていた。しかしすべての部族がそう考えていたわけではない。シャスタ族のシャーマンは女性で、その集団のなかでは最も高い地位を得ていた。体型的にトランス状態やそれと似たような状態になりやすい女性がシャーマンに選ばれた。ある日、シャーマンになる運命をたどっていた女性が日常業務をしていたとき、突然倒れた。なぜなら強烈な口調で話しかけてくる声を聞いたからである。彼女が振り返ると、弓と矢をもつ男がいた。その矢が彼女の心臓をつらぬかれた痛みを歌いなさいと男は彼女に命じた。しかし、その恐怖に耐え切れず、彼女は意識を失って倒れたのである。女性の家族の人たちが集められた。彼女は硬直し、横たわって、ほとんど息をしていなかった。彼女こそがシャーマンであることを示す特別な人物が、彼女の夢にたびたび現われることをみんなは知っていた。そうした夢のなかで、彼女は恐ろしい熊か

ら逃れたり、崖から落ちたり、スズメバチの集団に囲まれたりした。そのことから村人たちは、将来何が起きるかわかっていた。何時間かすると、女性は小さく唸り、地面を転がりまわり、激しく震えた。トランス状態の時に、精霊に教えられた歌を歌わねばならなかった。だんだん正気に戻りはじめると、彼女のうめき声は精霊の歌になっていき、最後には精霊の名を呼び、叫んだ後には彼女の口から血があふれた。

はじめて自分の精霊に会った後意識を取り戻すと、彼女はその晩最初の事始めとしてのシャーマン踊りをし、天井からぶら下がった紐で自分を結わえた。三日間踊り続け、三日目の夜精霊から力を授かった。踊りながら、彼女はその時がだんだん近づくのを感じた。そして次のように叫んだ。「彼は私を射る。彼は私を射る。」ある種の強硬症の発作によってよろめき、床に倒れて死ぬ前に友だちが近づき、彼女を捕まえた。この時から、彼女は精霊の力を示す目に見えるものを身につけていた。それはツララのようなもので、踊りのなかでいつもそれを見せる。体の一つのところから取り出し、別のところに仕舞うのである。この時から彼女はもっとひどい強硬症を示すようになり、自分の超自然の力を効果的に発揮するようになった。生死にかかわるような非常事態が起きる度に彼女は呼び出され、予言や相談にのることなどを行なった。つまりこのような過程を経て、彼女は偉大な力と重要性²⁾をもつ女性になっていったのである。

強硬症の発作は家系の恥部として見られたり、恐ろしい病気の兆候と見られたりするのではなく、そこの文化の中では認められ、他の人たちよりも優れた人たちとして見られたことは明白である。強硬症は、社会的に最も尊敬される人が持つ特徴で、その集団においては強硬症を持っていることは名誉であり、褒め称えるべきことであった。強硬症の人たちこそが、その文化の中では権力を持ち、リーダーとしての地位が与えられたのである。

社会構造のなかの「アブノーマル」なタイプが現地の人たちに受け入れられていれば、そうした人たちの記述は世界のあちこちに残されている。シベリアのシャーマンは集落を支配していた。シベリアの人たちによると、シベリアのシャーマンは精霊の意志に自分を委ねることにより、深刻な病気、発作の始まりを完治してもらい、それによって偉大なる超自然的な力を得て、他の誰よりも優れた健康と活力を頂いたのである。精霊の意志に自らを委ねている間、何年も狂気のなかにあることもあれば、その間、あまりにも無責任な行動を取るため、監視されることもある。そうしなければ、雪のなかに出て凍死する恐れがあるからである。またある人は病気になり、死にそうなくらいやつれてしまうこともある。そして、血の汗をかくこともある。シャーマンの修行によって彼らは立ち直り、肉体の限界に至るまで霊界との交信をすることで安らぎを得て、次の行動に移ることが可能となる。この強硬症発作はどのようなシャーマンのパフォーマンス³⁾においても、中核となるものである。

シャーマンの精神状態とその社会が彼をどのように扱ったかという記述がキャンノン・キャラウェイ⁴⁾の古い文献にある。それは南アフリカのズールー族のこぼを借りて表わしたものである。

「預言者になろうとしている人は次のような状態になる。まず活発になる。しかし、しばらくすると繊細になり始め、本当の病気ではないのだが、弱々しくなる。そしてある種の食べ物を避けるようになり、自分の好きなものを選ぶようになる。しかし、あまり食べなくなる。やがて、体のあちこちが痛み始めたと訴え、川に流されていた夢をみたと周りの人に言う。彼は色々なものの夢を見て、体は泥だらけになる。そして彼は夢が宿る身体になる。彼は夢をみると友だちを起こし、次のように言う。『私の体は今日、泥だらけだ。たくさんの人が私を殺そうとした。しかし、それを逃れた。だがどのようにして逃れたのかわからない。目を覚ますと、体の一部が他の部分とは違った感覚であった。』最後に、男は重病になり、みんなは預言者のところに行き、どうすればいいか聞く。」

「予言者たちは、この男が柔らかい頭（すなわちシャーマニズムにまつわる感受性を持った頭）になろうとしていることをすぐには見抜けない。真実を見きわめることが難しいのである。彼らはでたらめなことを話し、間違ったことを断言し、しまいにはその男の家畜は彼らの命令によって食べられてしまう。彼らは村の精霊が家畜を求めており、食べ物を食べるのだと言う。最後に、その男の持っているものはすべて使い尽くされるが、彼はまだ病気のままで、他の人たちはどうしたらいいのか途方に暮れる。なぜなら、もう家畜は残っていないからである。そして彼が何かを求めれば、友達が助ける以外方法はないのである。」

「最後に予言者が現れ、他のすべての予言者は間違っているのだと言う。予言者は言う。『彼は精霊にとりつかれているのだ。それ以外の何ものでもない。精霊たちが彼に入り、二つに分かれる。一方の人々は『いや、彼を傷つけない。それを願ってはいない。』と言う。だからこの男は回復しないのだ。精霊の前に立ちふさがると、彼を殺してしまうことになる。なぜなら、彼は予言者にも普通の人にもなれなくなってしまうからだ。』

「そのためこの男は二年間ずっと病気のままかもしれない。悪くすると、もっと長くこの状態のままかもしれない。彼は、自分の家の中に閉じ込められているのだ。この状態は、髪の毛が抜け落ちるまで続く。彼の体は乾いてカサカサだ。彼は自分自身を予言者だと宣言したくない。彼は何度も何度もあくびをし、続けてくしゃみをすることによって、まもなく予言者になることを示す。また急にカギタバコを好きになることから彼が聖職者になりかけていることがわかる。彼は、すぐにカギタバコがほしくなる。これを見て人々は彼によきものが与えられたことを知るのである。」

「その後、彼は病気になり、ひきつけを起こす。水をかけることで、しばらくは治まる。そして絶えず涙を流す。最初は少しだけだが、やがて大きな声で泣き、人々が寝ている間に、彼は音をたてたり、歌を歌ったりして人々の目を覚まさせる。彼は歌をつくり、男や女は目を覚まし、みんな歌い始める。村の人たちは寝不足で悩む。なぜなら、予言者になろうとしている人は、みんなに迷惑をかけるからである。彼は眠らず、腕を絶えず動かし、

眠ったとしても、うたたね程度である。そしてまた起きると歌をたくさん歌う。そして近くの村にいる人たちは、夜になって彼の歌が聞こえてくると、自分たちの村を離れ、彼と一緒に歌う。もしかすると、彼は朝まで歌うかもしれず、誰も眠らないかもしれない。その後、彼は蛙のように家中を跳び回る。やがて家は彼にとって小さ過ぎるようになる。彼は跳んだり、歌ったりしながら出ていき、水の中の葦のように震え、汗をポタポタ垂らす。」

「こんな状況では男はいつ死んでもおかしくないと思われは思う。骨と皮だけになり、みんなは翌日の太陽が彼を死なせると思う。この時、たくさんの家畜が食べられる。なぜなら、男が預言者になることをみんなが期待しているからである。やがて、『夢のなかで』男は古代の先祖の霊を告げられる。その霊は次のように言う。『どこどこへ行くと、預言者があなたのために吐剤（シャーマンになるために儀式で飲まれる薬）を作ってくれる。それを飲めば、あなたは預言者になれる。男は預言者のところに行き、薬をもらう。すると、何日間か静かになる。預言者のところから戻ると、違った男になっている。男は清められ、預言者になる。』

預言者になった男は、死ぬまでの出来事を予言し、無くしたものを見つける。

文化によってはかなり不安定な人間のタイプでさえも地位が与えられ、社会的に認められることもある。不安定な人間に特有のものを、人間の行動のなかの最も価値あるものとして扱えば、その人間は社会に応え、社会的に順応できるか否かという通常の価値観に関係なく、社会的な役割をきちんと果たすようになる。

このように、私たちがアブノーマルだと決めている人たちが、他の文化においては適切に機能することができるのである。強硬症やトランス状態の人たちのケースはその一つの例に過ぎない。私たちの文化において不安とされる特性の多くは、他の社会ではあえて取り上げられ、鍛えられるのである。ホモセクシュアリティはその絶好の例である。ホモセクシュアリティは、トランス状態と違い、日常の活動の妨げとはならない。さりげなく問題を投げかける。ホモセクシュアリティの傾向にある人は、私たちの文化のなかで正道からはずれた人たちと同じくらい様々な辛酸や葛藤を経験する。そしてその苦しみとホモセクシュアリティを結びつけることになる。しかし、こうした結果は明らかに地域的なものであり、その文化特有のものである。どんなに能力があるホモセクシュアルでも、文化によって矯正を強いられれば、生きる力を失うであろう。ホモセクシュアルに名誉ある地位を与えている社会で彼らは与えた名誉ある地位にふさわしい活動をしている。プラトンの『共和制』はそのようなホモセクシュアリティの解釈を説得力をもって語っている。そこではホモセクシュアルが豊かな人生の主要な要素であると考えられ、当時のギリシア社会では、それが当然のこととみなされていた。

ホモセクシュアリティは、元々非道徳的だと思われていたわけではない。それに対する考え方はもっと多様であった。アメリカ・インディアン多くの部族においては、フランス人が

ベルダーシュ⁵⁾とよぶオトコオンナがいた。彼らは思春期、あるいはそれ以降に女性の服を身につけたり、女性の職業に就く男である。時には別の男と結婚し、一緒に住む。こうした男性は同性愛者ではなく、性器が小さいため女性からからかわれるのを避けるのにこのようなオトコオンナになることもある。ベルダーシュたちはシベリアの男女とは異なり、一流の超能力をもった人とはみなされず、女性の職業のなかのリーダー、あるいは特定の病気を治す人たち、また部族によっては社会的な事柄を扱う親切な管理者として扱われた。いずれにしても、彼らには社会的な地位があった。正道からはずれた人たちが味わうような社会的孤立から生まれる葛藤はなかった。

何がノーマルかということが文化によって定義されている度合いを最も明らかに示している例は、アブノーマルとされるものが別の文化では社会的構造の基礎となっているケースである。こういったケースについて記述するのは別の機会としたい。フォーチュンによるメラネシア北西の島の研究⁶⁾にはパラノイアどころではない特徴をもつ人たちが社会の基盤を構成しているという記述がある。この部族は、村人全員が呪いをかける人たちだと考えているため、必ず敵のなかから結婚相手を選ぶという外婚制度をとっている。そしてその相手は生涯、危険で油断できない人となる。作物がうまく育てば、それはどこからか何かを盗んだ結果だと思う。近所の豊作を盗み取る魔術をだれもが使うからである。したがって、自分の庭で芋がたくさん収穫できた時は、必ず秘密にし、その秘密は何よりも堅く守られるのである。贈り物をもらった時の相手に対する礼儀正しい言い方は、「ここで私が毒殺されたら、どのようにしてお返しすればいいのでしょうか」である。彼らは絶えず毒殺のことを考えている。どんな女性も一時たりとも、自分が料理している鍋のそばを離れることはない。メラネシア文化地域の特徴である婚姻時の贈り物の交換でも、このドブ族では違いが見られる。文化全般にわたるドブ族の恐怖と不信感、他の文化とは大いに異なる点である。ドブ族は不信感を持っているため、夜通しの宴や儀式は行わない。家族の間でさえも、同じ種を共有してはならないという厳しい習慣があり、それは堅く守られている。他人の食べたものは、自分にとっては毒であるため、みんなが買い物をする店などという考えはない。収穫の何ヶ月か前には、この社会全体が餓死に近い状態となるが、誘惑に負けて自分の種芋を食べてしまうと、阻害され、生涯よるべのない人になってしまう。そしてもう元には戻れない。そうなるとうつ離婚となり、すべての人間関係が絶たれるのが一般である。

ところで、この社会において他の人と働いたり、一緒に何かをすることができず、みんなから気が変だとみなされた一人の男についてフォーチュンは次のように記している。その男は急に走り回ったり、興奮して口から泡を吹いたり、手当たりしだいに人をナイフで刺すような人ではなかった。たとえそうであったとしても、そのような行動はこの社会では異常とは見なされなかった。こうした発作を起こすような人たちを何らかの監視下に置くなどということも考えられなかった。そのような発作を起こす人がいれば、その人から逃れ、その人の邪魔になら

ないようにした。「明日になれば直るよ」と言っただけ。しかし、フォーチュンが記述しているその男はとて明く、やさしく、働くのが好きで、他人を助けるのが好きだった。人を助けたいという彼の気持ちはあまりにも強く、自文化に反するとはわかかっていても、それを抑えることができなかった。まわりの男も女も、彼と話すときには彼を笑い者にした。彼は愚かで、単純で、完全にいかれていると思われた。しかしながら、おそらくキリスト教においては、彼のような人を徳のお手本とみなし、そのような文化で育った民族学者は彼のような人を快い人とみなすのであろう。

もっと極端な例は、北アメリカの北太平洋岸の文化である。それが極端である理由は、さらに複雑なアブノーマルに結びついているからである。クワキユートル族の文化⁷⁾は、19世紀の後期に記録された時点では北アメリカで最も活気あふれる文化であった。豊かな物資を生産する経済の上に成り立っており、彼らの主食である魚は労少なくして豊富に獲ることができた。また家屋の建築材料や家具や工芸品の材料となる木材は伐採しなければならないが、いつでも手に入った。彼らは海岸線の村落に住み、他のアメリカ・インディアンに比べると村のサイズも適当な大きさであった。彼らは丸太をくり抜いたカヌーを使って海を渡り、絶えず他の部族ともコミュニケーションをとっていた。

クワキユートルの文化は北アメリカの原住民文化のなかでも最も活気あふれ、豊かな文化の一つであった。手の込んだ工芸品や儀式、そして目を奪うような精密な芸術をもっていた。病んだ文化の形跡は全くなかった。北西海岸の部族は豊かであった。そしてその富は私たちの文化と全く同じものであった。つまり彼らは経済的な物資を豊富に持っていただけでなく、富を操るゲームも私たちと同じように行っていた。単なる表面的な形態で需要を満たすだけでなく、それは資本、利息、そして大なる浪費をも含むものであった。そのマネーゲームは子どもの頃から始まり、ゲームのルールに付随するすべてのことが含まれていた。父親は子どもの能力に合わせて、小さな宴会、あるいはポトラッチによって子どもに富を与えると、子どもはそれを受け取る義務があり、一定の期間内に利息をつけて返さねばならなかった。その利息は1年で100%にも上った。つまり子どもが成長した頃には、子どもはそのゲームに熟達しており、成人式やその他さまざまな機会を利用して、より大きなポトラッチが与えられた。子どもは高利で貸したりすることで、自分の財産としてかなりの富を持っていた。この文化においては、富の分配なくして人から認められたり、祝福されたりすることなどあり得ないのである。価値あると考えられるすべてのもの、たとえば名前や歌、物などは家系によって引き継がれたが、その際には公の場で富が分配された。この文化における最大の関心は、先祖や贈り物、または結婚によって得た自分の富をひけらかし、認められることであった。すべての人が多かれ少なかれこのゲームに参加していたが、ほとんどはもちろん単なる観衆に過ぎなかった。そして最も高いレベルでは、酋長同士がそのゲームで競い合った。個人レベルで競い合っているだけでなく、家族あるいは自分たちのコミュニティーを代表して競い合った。そしてコンテス

トの目標は、自分に栄光を与え、相手を屈辱に追い込むことであった。このレベルになると、競い合いに使われるものは、一つのポトラッチで何千もの毛布だけでは済まなくなり、より高い価値のものが使われた。より高い価値のものは、私たちの社会ではお札のようなもので、彫刻が施された銅板である。それぞれ名前がついており、その由緒によって価値が異なっていた。その一つは、一万枚の毛布にも匹敵し、それを所有し、大きなポトラッチによってさらに増やすことは、北西海岸の酋長たちにとって最も大きな栄光であった。

こうした富の操り方の詳細は、色々な面で私たちの経済界のパロディーのようであるが、この論文で注目したいのは、このマネーゲームの動機である。その動機は私たちの文化では誇大妄想狂と呼ばれるものである。際限のない自負心と相手を見下すやり方は、他の文化においてはアブノーマルな人の独り言という形でしか理解されず、類をみないものである。ポトラッチにおける酋長の歌やスピーチにこの態度がよく現われている。

わあ、どけ、どけ。他の酋長を叩いて怒りを表わしたいのだから向こうを向いておれ。

すばらしいポトラッチ、最高のポトラッチ。⁸⁾小さい奴⁹⁾はフリをするだけ、頑固な奴は同じ銅板を何度も何度も売り、部族の小さい酋長にやってしまう。ああ、慈悲をせがんでもムダだ。ああ、慈悲を請うてもムダだ、腕を上げなさい、そこの舌をだらりとしているお前、壊すぞ。¹⁰⁾ケンツグン (Kentsegum) という名の偉大な銅板を消してみせる。この銅板は偉大なるバカ、偉大なる裕福な人、すべてを超越した人、最も先に進んでいる人、そして酋長のなかで、偉大な人食いダンスの踊り手の持ち物である。¹¹⁾

私はみんなを辱める偉大な酋長。

私はみんなを辱める偉大な酋長。

私たちの酋長が現われると、みんなは恥じ入る。

私たちの酋長はみんなを嫉妬させる。

私たちの酋長がこの世で、一年の最初から最後まで続けてやってのけていることに人々は顔を覆いたくなる。酋長は一年中、繰り返し部族に油の宴会を何度も何度もやってくれる。

私は支配する偉大な酋長。

私は支配する偉大な酋長。

この世で駆けずり回っている人たち、働いてばかりいる人は尻尾を失う。¹²⁾本物の酋長¹³⁾の下にいる酋長たちをあざ笑う。

彼らに慈悲を！¹⁴⁾髪をとかさず、硬い髪が生えた彼らの乾いた顔に油を塗りなさい。

本物の酋長の下にいる酋長たちをあざ笑う。

本物の酋長の下にいる酋長たちをあざ笑う。

私はみんなを辱める偉大な酋長。

私だけが偉大な木であり、私が酋長である。

私だけが偉大な木であり、私が酋長である。

部族の人たちよ、お前たちは私の部下だ。

お前たちは家の奥の真ん中あたりに座れ、

部族たちよ、おまえたちの財産を数える者を連れてこい。おまえたちの財産はどうせ偉大なる銅板職人、つまり酋長によって配られてしまうのだ。

おお、私は彼らをあざ笑う。彼らのポトラッチの家の中で箱¹⁵をカラにし、人を招待しても苦い飢えでいっぱいの子供の彼らの家をあざ笑う。彼らはあひるのように私につきまとう。

私だけが偉大な木で、私は酋長である。……

このような自負心を著した賛美歌をいくつか引用した理由は、この文化において顕著に発達している妄想的な人生観の基盤となる誇大妄想を、心理学者に示すためである。この文化ではすべてのことが侮辱¹⁶の度合いによって測られる。侮辱とみなされる行為は、敵や隣人による差別的な行為のみならず、カヌーが引っくり返った時に体をかわす行為や、斧が手からすべってどこかを切ってしまうような行為といった不作法な行為すべてを含むものであった。これらすべての行為は、自分の自尊心を傷つけるものと考えられ、それに対してまず第一に考えるべきとされるのは、どのようにして仕返しをすべきか、どのようにして屈辱を払拭するかということであった。嘆きは習慣として定着しておらず、その代わりとしてすねることが習慣であった。どんなに些細なことであっても、たとえば木を切っている時に狙いがずれたり、お気に入りの子どもが死んでしまったりするような自分の面子がなくなるような不運があった場合でも、北西海岸のアメリカ・インディアンは自分の面子を取り戻すまで布団に入り、壁を向いたまま何も食わず、何も話すことはなかった。自分自身そしてコミュニティからも、伝統的掟によって、自分の名誉を挽回する方法を考えついた時にはじめて、彼は起きあがる。自分の汚点を拭き去るために資産をばらまくか、自分に代わって悔やむことになる人を探しに行くかのいずれかである。どちらにしても、彼の行動は自分が受けた不運に対する具体的な対応ではなく、ただ仕返しをするための巧妙に練られた行動なのである。もし彼にばらまくお金が無かったり、他の人に屈辱を与えるため誰かを殺すことができなかった場合には、自死を選ぶこともあった。なぜなら自分が考える自分自身のイメージにすべてを賭けたにもかかわらず、自尊心が傷つけられると、人生に何の意味も見い出せず、傷ついた自尊心を抱えて力尽きてしまうからである。

人生のあらゆる出来事は上記二つの伝統的な方法で処理される。彼らにとってこの二つは同じことであった。武器で戦ったとしても、いわゆる「物」で戦ったとしても、根底にある考え方は同じであった。昔は槍で戦ったが、今は物で戦う。どちらにしても結果は同じで、相手と

戦って勝つことが目的であり、どちらかといえば、戦場でよりもポトラッチの場の方が、負かした相手に対して勝ち誇る満足感が得られる。性生活においてどの段階に達したか、あるいは喜びの絶頂、悲しみのどん底といった出来事で私たちの人生を測るのに対し、彼らの場合、自分の名誉ある立場を高められたか、あるいは自分の客をどれだけ恥じ入らせたかによって測られた。子どもの誕生日でさえ、この伝統的な目的を達成するための文化的材料なのである。すべては自分の個人的ステータスを高めるもので、まわりの人たちを恥じ入らせることが自分を豊かにするのである。ヌートカ族 (Nootka)¹⁷⁾においては、娘の思春期の行事のために父親は、彼女が走り回れるようになった頃から財産形成に努めねばならない。娘が思春期を迎えると、かつて聞いたこともないようなスケールで財産を分配する。それによって、ライバルを恥じ入らせる。彼らの文化のなかで重要な位置を占めるのは、娘の女性としての成長にあるのではなく、父親が自分の偉大さを証明し、同僚を恥じ入らせる機会にあるのである。

この文化のこうした特徴を最もよく現しているのが死別の時の状況である。クワキユートル族の間では、親戚が病気で死のうが、敵に殺されようが親戚の死は、他の人の死によってあがなわれねばならない理由となる。自分が嘆かねばならない状況にあるということは、誰かに打ちめされたということの意味する。ある時、酋長の妹と娘がピクトリアへ出かけ、悪いウィスキーを飲んだせいか、あるいは舟が転覆したためか、いずれにせよ二人は帰ってこなかった。酋長は兵士を集め、次のように聞いた。「お前たちよ、誰が嘆き悲しむべきだろうか、私が嘆き悲しむべきか、それとも他の人が嘆き悲しむべきか。」兵隊の代表が答えた。「もちろん、酋長であるあなたではなく、他の人であるべきです。」即座に兵士たちは戦いの宣言をし、不幸を打ち消すための兵士を集める。彼らは出かけ、7人の男と子どもが寝ているのを見つけ、彼らを殺す。「すると、夕方セバに到着した時に、みんないい気分だった。」

ここで注目すべきことは、私たちの社会においてはセバに到着した時にいい気分を感じるということは、確実にアブノーマルということである。私たちの社会にもクワキユートル族と同じように感じる人がいるかもしれないが、こうした状況下でこのような気分を感じることは、普通ではないし、許されざることである。北西海岸では、このような状況が和やかなことだと感じる人が好まれ、ラッキーな人ととらえられるのである。そして上のような状況を不快に思う人たちは、アンラッキーな人たちとなる。後者のような少数の人たちは、クワキユートルの文化では自分の反応と抗い、自分にとって受け入れ難い反応を身につけるしかない。平原インディアンの夫は、妻を奪われてもプライドが高すぎて戦わないが、北西海岸では、そのような自分の文化の特性を抑制することにおいてのみ生き残ることが可能となる。さもなくば彼はその文化では変人扱いされ、彼らがいうアブノーマルな例となる。

北西海岸で誰かが死んだ時、その仕返しとして殺す相手を探すというのは、血に染まった仇討ちでも、制度化された復讐でもない。だれかを殺した後に、喪にふしている人(殺した人)が、その死に対する責任をとろうとする努力は一切ない。息子を失った酋長は、気が向いた家

を訪れ、その家の人に言う。「私の王子が今日死んだ。だからあなたも彼と一緒に行きなさい。」そして彼はその人を殺す。彼らの解釈では、酋長は尊厳をもって行動したのである。なぜなら彼は打ちのめされることがなかったのだから。彼は打ちのめされたのではなく、強くやり返したことになる。この文化の不幸に対する基本的な被害妄想的解釈を理解しなければ、このすべての工程が無意味となる。死も他の不幸な出来事と同じように、男のプライドを揺るがすもので、それは屈辱という範疇においてのみ対処されるべきものなのである。

北西海岸で尊いとされる行動は、私たちの文化においてアブノーマルと考えられるものである。にもかかわらず、それを理解し、それについて語るための言葉は私たちの文化に存在するため、ある程度私たちの文化に近いと言える。誇大妄想の傾向は、私たちの社会では確実に危険なものである。それにこだわることで、誇大妄想が助長されることもあるが、その際、二つの選択肢がある。選択肢の一つは、誇大妄想をアブノーマルで、批判に値することと考えることで、これは私たちの文化が選んだ態度である。もう一つの選択肢は、誇大妄想を理想の男性の中心的な属性とみなすことであり、北西海岸の文化はこれを選んでいる。

簡単にしか示すことはできなかったが、これらの例をみると何がノーマルであるかは、文化によって定義されているということ認めざるを得ない。上に示したドブ族の文化や北西海岸の文化の中で育ち、欲望や人格を形成された大人が私たちの文化に連れてこられたら、その人はまちがいなくアブノーマルの範疇に入る。そして社会に受け入れられない心理的葛藤を味わうことになる。しかし、自分の文化のなかでは、彼は社会的に叩き込まれた道徳を身につけた社会の中心となるような人であり、不安定な立場に追い込まれるようなことは一切ない。

どのような文化においても、人間がとり得る行動すべてを社会的規範に組み込むことはできない。言語で色々な音声が可能であり、様々な可能性のなかからその言語がいくつかのものを選んで規範化しない限り、言語コミュニケーションが成り立たないのと同様に、その土地の衣装や家の造り方、そしてその人々の倫理観や宗教に至るまで、可能な行動からその人たちがどのような選択をするかによってその人たちの組織立った行動は異なってくる。社会的に認められた経済的義務、あるいはセックスのタブーといった選択は、どの音声がその言語で使われるかということと同じ位、理屈なしに、そして無意識に選ばれる。そのプロセスは、その集団のなかで長きにわたって形成され、数々の孤立した歴史的出来事や人々の交流から成り立っている。どのような総合的な心理の研究においても、可能な行動の膨大な選択肢のなかで歴史的に何が選ばれてきたのかという点は、非常に重要なことである。

どの社会¹⁸⁾も何かに対するわずかな傾きから生じ、その好みはさらに強くなり、その文化は選ばれた方向にどんどん組み込まれ、好まれない行動は省かれていく。私たちにとって確実にアブノーマルとみえる性格の多くは、異なった文化において制度化された生活の基盤となることがある。逆に私たちの社会で普通の人が尊ぶべき性格の特性は、異なった文化においては異常なもののみなされることがある。つまりノーマルとされるものは、かなり広い可能性

のなかで文化的に定義されるのである。ノーマルという言葉は、どの文化においても社会的に練り上げられた人間行動の部分であり、アブノーマルというのはその文化では使われない人間行動の部分の指している。物事をみる私たちの目そのものが、私たちの社会の長い伝統的な習慣によって調整されているのである。

このことは心理学よりも倫理との関係において言われていることである。人間がやることは人間のどうしようもない本質から由来するものであるといった誤った考えをする人は今日ではない。人間の本質が第一原則であるといった評価を下すこともない。各社会においてそれぞれ倫理が異なり、倫理という言葉は、それぞれの社会で認められた慣習を都合よく倫理とよんでいるに過ぎない。それが慣わしだと言うよりも、「それは道徳的だ」と言う方が好まれる。なぜそちらを好むのかということそのものが、倫理の科学的検証が求められることである。しかし、歴史的にはこれら二つの言い方は、同等に扱われている。

ノーマルの概念は確実によいものの一部として扱われる。それは社会が認めたものである。ノーマルな行動は、特定の社会で期待されている行動の範囲に収まるものである。様々な人たちの間のノーマルの多様性は、その集団が行動のパターンのバリエーションとしているものである。そしてノーマルとは文化的に確立された行動から切り離すことはできない。

それぞれの文化は、その可能な行動のなかから選んだ一部を綿密に発達させたものである。まとまりがあり、一貫性がある文明は、特定の行動に偏る最初の衝動をその特性にしたがってさらに発展させる傾向があり、他の文化からみると、その方向は極端で、より異常なものに見える。

その文化のなかで強められた行動パターンの特徴は、その文化ではノーマルと見なされる。それらの行動パターンを生まれながらにして心地よいと感じたり、子どもの時に植えつけられたことで心地よいと感じる人は、その文化の中では評価される。しかし、異った価値で形成された社会では、その人は偏見や差別を受けるかもしれない。逆に、その社会で選ばれた行動を好まない人たちは、変人と見なされる。たとえ別の文化では、その人の人格が価値あるものと見なされたとしても。

ドブ族 (Dobuan) のなかでは、裏切りに対する恐怖感を抱かず、働くのが好きで、他の人を助けるのが好きな人は精神病でバカだと見なされる。北西海岸で人生を侮辱のコンテストと見なさないような人間は、文化的に受け入れられず、あらゆる困難を経験する。隣人を簡単に侮辱したり、自分の体験を屈辱と見なすことができず、朗らかで優しい人は、この社会で普通とは違った形で満足感を得ることはできるかもしれないが、その文化が受け入れている普通のパターンでは、満足感を得ることはできない。その人がもし特権をもった家系に生まれておれば、その人は全人格を否定することによってのみ、成功することができる。彼が成功することができなかったなら、自分の文化に対する裏切りとなり、彼はアブノーマルと見られる。

社会のなかの個人があるタイプの行動パターンをもっており、それがその個人が属する文化

の確立した行動パターンとは異なることがあることについて上述した。異なった文化について私たちが知る限りにおいて明らかなことは、それぞれの社会には違った性格の人たちがいるということである。それは研究の題材として扱われてはいないが、現存する資料をみると、様々な性格が存在することは普遍的な現象である。つまり、人間が集まっているところにおいては、人間の行動にはある程度の幅がある。しかし、同じ行動タイプをもつ人の割合は、社会によって異なり、普遍的ではない。どのグループにおいても、割合はほとんどの場合、文化のパターンによって形作られている。言い換えれば、ほとんどの人は柔軟性をもっており、その人が生れ落ちた社会によって自由に形作られるのである。たとえばインドのようにトランス状態に価値を置く社会においては、非日常的な経験をする人が当然いることになり、ホモセクシュアルを受け入れる社会では、ホモセクシュアルが存在することになる。資産を蓄えることが人間の主たる目標と考える社会では、人々は資産を蓄えようとする。その文化によって確立された行動パターンからはずれた行動をする人は、たえず少数である。しかし、その少数を誇大妄想をもつ大多数の「ノーマル」に仕立て上げるのは簡単である。それは、私たちの社会においてこれまで物質欲をもたなかった人を、社会が物質欲をもつ人に仕立て上げるのと同じくらい簡単なことである。変人が比較的少数な理由は、何が正常かという明確な直感をもってその社会が形成されているからではなく、普遍的事実として人間は与えられた枠組みに進んで合わせようとするからである。

相対的なノーマルの度合いを問うことはアカデミックな題材ではない。第一に、ノーマルということが相対的であるとすれば、変人が無能者扱いされること自体、無意味となる。変人はその社会が求める生存力に欠けているのではなく、たまたま彼の性格に合わない文化に生まれてきただけに過ぎないのである。彼がその社会に適応することができないということは、適応するのに社会と戦わなければならないということであり、その社会でノーマルとよばれる人たちは、社会と戦う必要がないということであらわしている。

治療学的に言えば、その社会において普通ではない人たちに対して寛容であり、喜んで受け入れる人を教育することは、どの社会においても健全な精神を保つために不可欠なことである。このように寛大であれば、変人とされている人たちは自立することができ、自分に対して正直に生きることができるようになる。社会が彼を自立させることができ、十分に機能できるような存在基盤を与えておれば、彼は苦悩に陥ることはないのだ、ということに気づくことができる。

相対主義の考え方の結果として、さらに次のことが言える。アブノーマル心理学の絶対的範疇から見れば、どの文化においても、その地でアブノーマルとされる人たちからほど遠い人たちのなかに、極端な人たちが多数いるはずである。その文化のこだわりによって、ヒステリーや癲癇や妄想の症状はエスカレートする。そして同時に、社会はますますこういった人々に頼るようになる。西洋文化ではエゴを満足させることを文化的に肯定するが、絶対的なアブノーマ

ルなカテゴリーからみれば、これはアブノーマルとみなされる。とどまるところを知らず、傲慢なエゴイストのお父さん、あるいは警察官、あるいはビジネスマンは小説でよく取り上げられ、どの社会でもみかける。こういった個々人は刑務所にいる犯罪者よりも精神的に屈折しているが、社会に参加できないのは囚人の方である。こういった個々人は私たちの文明が保護する人格の極端なタイプである。

このようなことを考慮すると、定義上次のような混乱がおこる。アブノーマルなものは、一方で社会的に適応できないという基準に基づき、もう一方ははっきりとした症状によって定義される。このような混乱はアブノーマル心理学すべての議論に存在しており、それを明らかにするにはアブノーマルな個人の性格ではなく、その文化の特徴を考慮することによって可能なものとなる。しかしながら、アブノーマルな人たちが社会を脅かすことは強調すべき点であり、比較心理学は基本的にこの部分の研究となる。

ノーマルを特定の文明に基づいて統計的に定義する場合、他の文化における分布と照らし合わせない限り、私たちをどんどん自民族中心主義に陥らせるのは明らかである。アブノーマル心理学の最近の傾向では、実験に用いる様式をノーマルと位置づけ、この平均から逸脱したものをアブノーマルとするやり方をとる。この方法の価値は、次のことを示すという点にある。どの文化においても変人というのは、彼らの行動が文化的に支持されないために深刻な障害をこうむる可能性が高いということを示す点である。しかし、この方法だとそれぞれの文化には受け入れられないアブノーマルな人がいると同時に、その文化の好みを極端に満たしているアブノーマルな人もいる点を見落とすことになる。普遍的に通用するアブノーマル心理学の観点から見ると、アブノーマルの極端な例は、この後者のグループに見られる。この後者のグループは、一つの文化だけに基づいた研究では、その人が病院に収容されない限り、記述されないのが常である。

ノーマルの相対性についての研究は、将来の真の社会学にとって重要なものである。私たちの世代が描く文明は固定されておらず、神聖なものから派生した絶対的な規範から成っているものでもない。新しい視点をもたらす様々な問題を直視しなければならない。精神病に関してはノーマルと考えられる概念そのものが、人によって作られた概念であり、人が良しと考えて作り上げたものであることを認めなければならない。道徳の絶対的な定義に縛られると倫理的な問題を解決しにくいと同様に、アブノーマルな問題を扱う時、自分たちのノーマルなものが普遍的に正常であると考え、アブノーマリティーの問題を解決することは困難になる。様々な文化から例をとったのは、それぞれの集団が異なっており、その対比が大きいために上記の結論は否定できないことを示すためである。ノーマルは文化によって変化するだけでなく、時代によっても変化する。そのことの方が大きな問題である。時代によるこの変化は逃れようとしても逃れられず、この避けられない変化を将来十分に理解し、理性的にそれに対応することができるようになるのは可能だと思われる。¹⁹⁾ 自分の文化のノーマルなものを意識して批判

的に分析し、次の世代のための新しいノーマルなものを作り上げるための社会的プロセスを手がけ、それを達成した社会はまだない。しかしそれが不可能であるということにはならない。それは単にその作業が人間社会において、どんなに大きなタスクであるかということを示しているだけに過ぎない。

文化によって定められるアブノーマルなものに関するもう一つの主要な要素がある。現代、入手できる資料によると、上で述べたことよりそれは小さい要素であるように思える。しかし、その要素の重要性を無視することは、様々な誤解を招くことになる。どのグループにおいても精神的に不安定な人がとる行動は、他の行動と同様にその多くが文化的パターンに従っている。そのために、一カ所、あるいは一時代に流行した疾患は、別の地域あるいは別の時代にはほとんど報告されないのが常である。

精神不安定な人たちの行動で文化的パターン化が顕著なのは、トランス現象である。その人の不安定な状態を社会がどのように利用するか、またその人がどのような形でその精神状態を表現するのか、そしてトランス状態で何を見たり聞いたりするのかはその文化によってコントロールされている。トランス状態の人は、死者との会話から戻ってきて、死後の世界をこと細かに説明するかもしれない。あるいはまだ生まれる前の世界を訪れたり、居留地で失くしたものに關する情報を得たり、宇宙と一体になる体験をしたり、死ぬまで守ってくれる守護霊を得たり、将来起きる事柄についての情報を得たりするかもしれない。トランス状態にあっても、自分の文化の規則や期待に厳密に従い、その経験は結婚の儀式や経済的やりとりと同じ位、その文化パターンに沿っている。

トランス経験の内容がしらふの状態のときに期待されるものに従っていることは、よく知られることである。トランス状態、あるいはしらふの状態のどちらかを正常、あるいは正当としなければならない考え方に、私たちはもはや惑わされることはない。トランス体験は、その個人が固執しているものを表わしているに過ぎず、エクスタシーにおいて文化的パターンを表わしていることについてはすでに学問的に理解されていることである。

トランス体験というのは、ある地域、そしてある時代に限られた現象だが、精神不安定な人たちについても地域あるいは時代に限定されていると言える。しかし、様々な文化における精神不安定な人たちに関する情報は、不正確でいいかげんなために、私たちの社会に関するデータに相反しているように見える。北極地方のヒステリーや²⁰⁾マレーシアの狂ったように駆け回る病気は、はっきりとした精神病とされ、それは人種特有の病気であると思われていた。しかし、きちんとした心理的検証が欠けており、これらの現象は人種的分布とは一致していないことは周知のことである。同じ症状が異なる人種がいる場所でも顕著に見られる。狂ったように駆け回る症状や、この症状に対する治療法として似たものがメラネシア地域、²¹⁾ラ・デル・フエゴ²²⁾といった世界の果てにある地域においても記述されている。

私たちの文化における特徴的な大流行を人種の特徴と説明することはできない。中世に男女、

子どもをダンスに興じさせ、ヨーロッパの街にあふれたダンスマニア²³⁾は、私たちがいかに感化されやすいかを示す極端な例である。

これらの行動は、どんどん手の込んだものに仕上げられることがあり、人はそれにかかなりの労力を費やす。一つの文化のなかの不安定な人物の特徴は、他の文化では欠落しているか、非常にまれなものか、その特徴に社会的価値が与えられると、その特徴はますます顕著なものとなる。たとえば、なんらかの境界性行動をシャーマンの属性として認め、シャーマンに権威や影響力を与える社会では、シャーマンは自分の境界性行動を人に見せびらかすことになる。これまで見てきたとおり、カリフォルニアのシャスタ族 (Shasta)、そして世界の様々な部族においてひきつけを起こすことはシャーマンになるための切符を得たようなもので、シャーマンの実践には必ずそれがつきものである。他の宗教においては幻視、あるいは幻聴、そしてまた別の社会では私たちがヒステリー的な癲癇と呼んでいるものに近い行動などがこれにあたる。シベリアにおいては、私たちが霊界との交信の集いとしてよく知っている特徴が、シャーマンのあらゆるパフォーマンスで必要とされている。これらすべてのケースで社会で選ばれた特定の体験は、手が加えられ、地元の基準に合わせてかなり細かくパターン化されているのが常である。つまり、それぞれの文化は境界性行動という広い分野から、かなり少数のものを選ぶのだが、その体験のタイプを特定の人物の属性として結びつけるのである。その不安定な性格を持っている人物の特定の行動は、その人の持つアブノーマルな面を表わす唯一の、あるいは必然的行動ではない。社会の他の人と同じように、彼は伝統的に規定された行動パターンをとっているのである。逆に、私たちの社会を含めてどの社会においても流行からはずれた不安定な特徴がある。流行にあったものを感化されやすい人に与えれば、その人たちはそれをすぐに真似ることになる。彼らは社会の大多数を占めており、社会からはアブノーマルとみなされる。ここで明らかなことは、こうした人々の行動がノーマルとかアブノーマルということではなく、あるグループの生物学的、遺伝的特徴でもなく、社会的パターンに則っているということである。

文化的要素を切り離して、アブノーマルな人間の行動を絶対的な価値感で理解できるようになるのはまだ遠い将来のことである。私たちの文明における神経症や精神病の研究に由来する境界性行動のカテゴリーは、その地における一般的な不安定な性格を表わすものである。そのカテゴリーの成員を見ると西洋文明のストレスや緊張に関する情報は得られるが、必然的な人間行動の最終的な記述とはならない。そのような結論を得るには、訓練された観察者が集めた他の文化の精神疾患のデータの分析を俟たねばならない。そのような研究は目下のところなされていないため、比較材料に一致したアブノーマルの中核的定義はまだ先のことである。それは倫理の定義においても同じことが言える。何が道徳的、非道徳的行動かという地域の慣習は絶対的なものではないが、人類全体が共有するわずかな正邪の区別を導き出すことは可能である。精神学のデータが手に入るようになれば、アブノーマルな人間の傾向の最低限の定義は、

おそらく文化的に規定され、分裂病や躁鬱病などのように複雑に定義された精神病とはかなり異なったものになるであろう。

注

- 1) R. B. Dixon の論文 “The Shasta” *American Museum of Natural History, Bulletin* 17 (1907 年)、381-498 ページ。
- 2) その社会のリーダー的な存在になれる可能性があるということに惹かれている人たちは、その社会で奨励されるような行動をとる。このことは、その社会が神童をほめたたえたとしても、強硬症の人をほめたたえたとしても変わりはない。その行為が社会的に受け入れられることによって、そのままをする人が出てくる可能性があるという問題は重要なことではあるが、ここではあえてそれについて論じることはしない。ほめたたえられる行為がその社会で一般化するが、それを真似る行為もその社会で一般化するのである。
- 3) M. A. チャブリツカによる論文、“Aboriginal Siberia, a Study in Social Anthropology”、クラレンドン出版、1914 年。
- 4) *Religious System of the Amazulu*, Publications of the Folklore Society, XV, London, 1884 年、259 ページ以降。
- 5) G. B. Grinnell の著書、*The Cheyenne Indians* 『チェイニー族』1923 年、エール大学出版、E. C. Parsons の論文 “The Zuni La'mana” *American Anthropologist* 18 巻、4 号、1916 年。
- 6) R. F. Fortune の著書、*Sorecerers of Dobu*, ニューヨーク、Dutton 社による出版、1932 年。
- 7) フランツ・ボアズの論文 “The Social Organization and the Secret Societies of the Kwakiutl Indians” 1895 年のアメリカ国立博物館の報告書、ワシントンにて 1897 年に出版、311-738 ページ。“Ethnology of the Kwakiutl Based on Data Collected by George Hunt” 「ジョージ・ハントによって収集されたデータに基づいたアメリカ民族学局の第 35 回の年次レポート、2 巻、ワシントンにて 1921 年出版。『クワキユートルの民族学への貢献』コロンビア大学の文化人類学への貢献、第 3 巻、ニューヨークのコロンビア大学出版、1925 年。『クワキユートルの宗教』上下巻、ニューヨークのコロンビア大学出版、1930 年。F・ボアズと G・ハント共著論文「クワキユートル族に関する文献」*Jesup North Pacific Expedition* の第 3 巻の 1-3 部、ニューヨーク、1905 年。
- 8) 歌い手が開いている宴会。
- 9) ライバル側の酋長。
- 10) 銅板を壊すという意味で、最も価値あるものを壊せるくらいになっているということは、最高の偉大さを得たことを示す。
- 11) つまり自分自身を意味する。
- 12) 鮭と同じように。
- 13) 自分のことを指す。
- 14) これはもちろん皮肉である。
- 15) 宝の箱。
- 16) ここで言う侮辱とは、この文化において際立っている恥に対する異常な敏感さを指している。起こり得るすべての状況は、対抗的な状況として解釈され、感情は栄光と屈辱の間を行き来するのであった。

- 17) E・サピアの論文“A Girl’s Puberty Ceremony among the Nootka” *Transactions of the Royal Society of Canada* 誌、7巻、シリーズ3、1913年出版、67-80ページ。
- 18) ベネディクトは社会の発達過程をわざわざ有機的にとらえている。ある集団の考え方、あるいはそのプロセスを超有機的にとらえているわけではなく、「どの芸術も独特の規範をもっている」という言い方と同じように、社会の発展プロセスをとらえている。
- 19) J. デューイの著書、*Human Nature and Conduct: An Introduction to Social Psychology*、ニューヨーク、ホルト出版、1922年。
- 20) S. ノバコフスキーの論文、「地理的環境の反動としての北極あるいはシベリアのヒステリー」*Ecology*, V (1924年)、113-127頁。
- 21) Fortune, op.cit., 54-55.
- 22) I. H. Coriat, “Psychoneuroses among Primitive Tribes”, *Studies in Abnormal Psychology*, Ser., VI, Boston, Gorham, n.d. 201-208.
- 23) J. F. C. Hecker, *The Black Death and the Dancing Mania*, tr. B. G. Babbington, New York, 1885.